

大正デモクラシーと民衆の自己教育運動

——上田自由大学を中心として——

山 野 晴 雄

はじめに

いわゆる、自由大学運動は、一九二〇年代はじめから三〇年代はじめにかけて、長野県を中心に全国各地で展開された、民衆の自己教育運動である。

この自由大学運動については、すでに戦前、この運動の当事者であったタカクラ・テルが「これほど程度の高い農村の社会教育機関が全く農民自身の手によって経営されたとゆう事お世界のとこの歴史にも殆ど前例の無い事だ。それお教育史の上に特筆されなければならぬ」とのべていたが、いつしか忘れられ、ここ数年間まではほとんどかえりみられることがなかった。しかし、近年になつて、自由大学運動は、戦前日本における民衆の自己教育運動の先駆的実践の一つとして、注目をあつめるようになり、それにともなつて自由大学研究も著しい進展をみせている。

わたくしがここで検討の対象とするのは、この自由大学運動の起点となつた信濃自由大学(のち上田自由大学)の学習活動である。上田自由大学は、長野県上田・小県地方を中心に、ほぼ十年間にわたつて学習

活動を展開したが、その歴史は大きく二期にわけることができる。第一期は、主としてこの運動の理論的支柱であつた土田杏村の大きな影響のもとに学習活動をすすめていった時期であつて、一九二一年に発足してから二六六年に中断せざるをえなくなるまでの数年間であり、第二期は、主としてタカクラ・テルの協力のもとに農民運動とのかわりをふかめつつ学習活動をすすめていった時期であつて、一九二八年に再建されてから三一年に終焉するまでの数年間である。

わたくしは、一応そのようにわけられる上田自由大学の歴史を、できるかぎり具体的にえがいてゆくこととした。上田自由大学については、はやくから注目されてきたこともあつて、比較的多くの研究が蓄積されている。しかし、近年の資料発掘の成果をもとに、上田自由大学の歴史を再構成し、それを地域の歴史の展開のなかに位置づける作業は、まだなされていない。本稿で意図するのは、そうした種類の作業である。

〔注〕

(1) タカクラ・テル「自由大学運動の経過とその意義」『教育』第五巻第九号

(一九三七年)

(2) 自由大学研究の最近の動向については、拙稿「自由大学研究の現段階と課題」『自由大学研究』第二号(一九七四年)を参照されたい。

一 信濃自由大学の発足

長野県上田・小県地方の青年たちは、大正デモクラシーの思潮にもつとも敏感に反応し、地域変革へのさまざまなところみをおこしてきた。図書館活動の活発化、山本鼎の自由画教育と農民美術運動、信濃黎明会の普選運動、各町村における「時報」の刊行などは、いずれもそれを示す事例である。信濃自由大学の学習活動もまた、この地域の青年たちのそのような地域変革へのところみの一形態として存在するが、それは青年たちのおうせいな学習への意欲と、土田杏村やタカクラ・テルをはじめとする知識人の民衆教育への情熱とにささえられて展開されていったのである。

この信濃自由大学の発足の素地は、上田市外の小県郡神川村において形成された。それは、神川村の一青年山越脩蔵が、一九二〇年九月と二一年二月に、当時ようやく文明批評家として注目されはじめていた土田杏村を講師として哲学講習会を開催したことにはじまる。

上田・小県地方は、養蚕業とりわけ蚕種製造業の全国的な中心の一つであつたが、神川村は「この付近でも割合に富んだ村の一つで、したがって一般に青年の知識程度が高かつた」といわれる。山越脩蔵はこの神川村のなかでも比較的富裕な蚕種製造農家の青年であり、勉強好きな哲学青年であつた。かれは、同村の先輩で同じく蚕種製造に従

事していた金井正とともに、すでに全国的な注目をあつめつつあつた山本鼎を中心とする自由画教育と農民美術の運動に積極的にかかわつていたが、また青年団の普選運動にもかかわりあつてた。一九二〇年四月、かれは、青年団の名において、「普通選挙は世の中をより良く住みやすくする第一歩であります。良いことと知つたならば一日も早く実行するのが私共青年の意気であり任務であると信じます。何事も一人では出来ません。皆さんの御賛同を得て一日も早く此問題を解決して、改造の第一歩に入らうではありませんか」と、普通選挙を要求する檄文を村民に配布するとともに、普選運動のための講演を依頼する手紙を土田杏村にあてて送つた。当時病弱で明石に転地療養中であつた土田杏村は、この講演依頼を断るはかはなかつたが、「若し其の講演会の席で、お読み上げになり、多少でもお役に立ちましたら」といつて長文の手紙を書いて所信を表明し、終わりに「夏にでもなりましたら、しみじみと人生問題を語る機会を得たい」との希望をそえた。かれは、もちろん普通選挙には賛成であつたが、当時の普選運動のあり方には満足していなかつた。かれは、その返信のなかで、「彼等は党勢拡張の為に普選を餌として我々を利用している、そこで我々も亦彼等を餌として利用し普選を断行す可きです」と書いている。かれの理想は、「現在の政治家」とは「全然異つた人達によつて組織された新政治、即ち文化政治、哲人政治」の実現をはかることであり、「政治に人間性」を回復させることであつた。

この一農村青年と若き文明批評家との文通が、信濃自由大学の発足の出发点であつた。

土田杏村の講演は、二〇年九月二十二日、神川村の信濃国分寺の客

殿を会場で、哲学講習会として開かれた。土田杏村は、このときのことを、「青年Y(注・山越脩蔵―引用者)から、吾々農民が哲学の講義を開きたいから来てくれと言ったので、私は農民と哲学と余りにその対照が面白いので、その秋出張することにした。そして哲学の初歩手ほどきのようなものを致しました」と書き、さらに村の好学の青年を発見したよこびを、こう書いている。「村の青年が哲学の講習を聞く。非常に驚いたのである、が行つて見ると成るほどと思った。その計画を立てた、中心になつてゐる二人の青年は、家業に熱心なのは言ふまでもないが、その忙しい家業のひまひまに実によく読書をしてゐる。その読書を見ても、ちよつとした学者の書斎ほど沢山の哲学書を備へ附けてゐる。何にせよ大したものです。聞きに来た人達は主として小学校の教職員諸君であつたが、その熱心さも又大したものです」。

土田杏村が哲学講習会に出講したのは、山越脩蔵に「熱心に勉められてであつたが、それはまた、かれの日本文化学院を拠点とする文化運動の啓蒙をも意図するものであつた。すでに前年の一九年、かれはみずからの文化運動の拠点として日本文化学院の設立を宣言し、個人雑誌『文化』(二〇年一月創刊)を刊行しはじめていた。かれは、自己の思想的立場について、「余輩は民主主義者にあらず、又社会主義者にもあらず、現時の状況に対応し、強いて余輩の執らんとする手段の方針を命名せば、或は此を文化主義と名づけて可ならんか」とのべていたが、その文化主義とは「社会主義とアナキズムの統一としての文化主義」を意味するものであつた。それは、当時の社会主義および労働運動において問題となつていゝわゆるアナ・ボル論争に対応し、

それらを統一する思想的な立場を表明するものにほかならなかつたが、そうした立場から日本文化学院を設立したかれにとって、哲学講習会に出講し地方の青年と接触する機会をもつことは、その啓蒙の絶好の機会であつたにちがいない。哲学講習会の日程を打ち合わせた手紙のなかで、「なほその期間内に一夕文化学院設立のための宣伝演説を何処ぞでやる(成るべく多衆に)ことが出来たら仕合せです」と書いたのは、そうしたかれの意図を示している。

この哲学講習会は、聴講者の好評をばくし、講習会を「一回だけのものにせず、二回三回と翌年へ持ち越す組織にする」ことになつた。そうして翌二一年二月二十日には、第二回哲学講習会が上田高等女学校を会場に開かれ、それを契機に小泉哲学会が生まれた。この第二回哲学講習会のさい、山越脩蔵・金井正・猪坂直一の三人の青年と語らう機会をもつた土田杏村は、「当時文部省が肝入りでやつてゐた成人教育なるものの趣を指摘し、もつと系統的且つ組織的な民衆教育機関の必要と其の可能性を熱心に説いた。哲学講習会に先立ちかれは、「講習の方は御好意誠に感謝の外無く、実は今春だけは辞しようかと思つたのですが、人生意気に感ず。あへて出かけませう」と書き送つていたが、聴講者のおうせいな学習意欲にふれて、かれの念願である「学問と実行と其の中間に立つての勇ましい文化運動」の実現に積極的な意欲を示したものとみられる。これに対して山越脩蔵は、その土田杏村のことは感激しつつ、「哲学を軸としての文化科学の講座を一ケ年五、六回宛開いてそれを長期に亘つて関連させる組織」をつくろうと決意した。そうしてかれは哲学講習会を終えると、「人類ノ自己実現」と「現代日本ノ正当ナル改造」を目標にかかげて普遍運動

を展開していた信濃黎明会の、そのリーダーである猪坂直一に協力を求め、さらに金井正の助言をも仰ぎながら、民衆教育機関の設立に着手していったのである。そのさい、名称を自由大学と名づけたが、それは青年たちの提案によるものであつた。

土田杏村は、第二回哲学講習会を終えて京都に帰つたとき、「僕は何処までもアカデミックの学風を嫌ふので、あつて一般の民衆に講演するのが何より愉快なのです。一般の民衆さへ哲学化して来たら、アカデミイの連中が却て覚醒させられて了ふだらう。(中略)文化運動の方も大いに信頼して居ます。新しい人達のまどろをつくつて下さい。ガサガサした労働運動などにはうんざりして了ふのです」と、山越脩蔵あてに手紙を書き送つたが、かれは既存のアカデミズムはもらろん、既成の社会主義運動や労働運動にもあきつたない気持ちをいっていたのである。それゆゑ、自由大学の実現へかけたかれの意欲と期待は絶大であつた。二一年六月、土田杏村は、「御計画とに角賛成です。いちいち気づいたことをこの次に申し上げませう」と、山越脩蔵に書き、さらにその数日後にも、「二講座でも三講座でもといふのは賛成です。それぢやあ直ぐに成立します。実際最初はその位のつもりで、おいて直ぐに自由大学の名をつけておく方がよいと思ふ。僕が一つ持つて、高倉輝君(改造)に劇をいかした人、ロシア文学の専攻)が一講座を持つ。これは学校のない連中だからよい。高倉君はもう承知して居ますから。それであと誰れかを休みの時に廻して三講座はもう大丈夫出来ます。さうして居るうちに彼れ此れ承知してくれる事と思ふ。ぢやあそれで愈々やりませう。規定のやうなものを直ぐに考へて、意見を数日中にお届けしませう」と書き送つてゐる。そうして同

月三十日には、みずから「信濃自由大学趣意書」の草案を起草し、それを山越脩蔵に送つてゐる。そのさいかれは、「ゆつくりとした気分趣意書風のものをかいて見ました。別封を見て下さい。これは現代式に、第何条でなく、自由の様式でかいて見ました。各条御参考に供します。大体こんな具合のものだつたらどうですか。本当の成案が出来たら一度印刷前に見せて下さい。日本最初の試みだから趣意書なども馬鹿にされないものにしたいですから。(中略)此れが全国に波及したらどんなに嬉しいかと存じて喜びにたぐません」と書き、さらに趣意書の「印刷の出来た処で新聞にも発表し、その印刷と新聞とを一緒にして講師のところへ送る」方が講師の依頼には得策であり、出講の「依頼状の見本も私がかいてお送りしませう」と書き添へてゐる。この趣意書の草案はそのまま印刷に附され、同年七月、「信濃自由大学趣意書」として一般に公開された。

この趣意書は、まず「学問の中央集権的傾向を打破し、地方一般の民衆が産業に従事しつつ、自由に大学教育を受ける機会を得るがために、総合長期的講座を開き、主として文化的研究を為し、何人にも公開する事を目的と致します」と、設立の趣旨をのべ、講座の種類として「哲学、哲学史、倫理学、美学、社会学、心理学、宗教学、教育学、文学、文学概論、法学、経済学、社会政策」をあげ、「講座は此れを総合的とし、聴講生は此れを完全に聴講する事によつて統一的に文化学的研究をなすを得る様に致しますが、場合によつてはその講座を選定して聴講する事をも許します」とのべている。また開講の時期は、「聴講生の産業を顧慮」して十月から四月にかけての農閑期とし、その「各月の十日以内を一講座の連続開講時期とし、その講義を翌年度

に延長」する、としている。そして最後に、今後の計画として、「経費の一部を蓄積して、将来講師の自由に宿泊せらるべき宿舎を設け以て講師と聴講生との関係の密接を計り、更に講義のための校舎をも設備するに至りたい」ことと、「この自由大学運動を全国に波及して、到る処にその設備を見、以て地方文化の程度を著しく向上せしめんがために、全国の青年と提携すること」をあげている。

自由大学の理念は、この趣意書からも知られるように、まずなによりも「学問の中央集権的傾向を打破」し、現に「産業に従事」しつつある人びとの立場から新しい形態の大学を創造することにあつた。土田杏村は、そうした見地から機会あるごとに自由大学についての自己の理解を積極的に披瀝し、自由大学運動を理論的側面からささえていたが、かれがこの農閑期にひらかれる非アカデミーの大学の創造に意欲を示したのは、当時の地方農村青年のおかれていた教育・文化状況を克服することに関心をいだいていたからであつた。

かれによれば、地方農村青年は、「今更ごきおろして見たところで始まらない」ような青年団や処女会に組織され、また「徹底的のブルジョアカルト、現体制支持の宣伝教育を受け」る小学校教育の影響、さらに「概ね小学校長の古手」である「半宣修養技手」ともいふべき社会主事の影響などによって、「徹底的のブルジョアカルトを施されている」⁽⁴⁾。すなわち、「青年達が現に社会から受けて居るカルト」は、「人間を人間にする」「人間の判断や意思活動を自律的にする」教育ではなく、「すべての人間を現代社会制度の中へ無難に織り込んで了ふためのカルト」となっている。そこでかれは、そうした教育・文化状況におかれている「地方青年を、新しい思想にまで引き戻して来る方

策」としては、「根本的には教化運動の外には無い」とし、その「教化運動の前衛」としての役割を自由大学運動に求めたのである⁽⁵⁾。

こうして土田杏村は、教育による社会改造を企図する、わが国最初のプロレットカルト運動として自由大学運動を位置づけ、その実現に積極的にかかわっていたが、この地域の青年たちが学習意欲にもえ自由大学の創造に意欲的であつたのは、おそらく、二つの理由によるものであつた。

その一つは、第二次世界大戦中の好況とそれにつづく経済情勢の激変という、経済的な条件であつた。この地域の農家にとつての主要産業である養蚕・製糸業には、一九二〇年の戦後恐慌をさかいに、ゆきづまりの傾向があきらかになりつつあつた。いまこの地域の繭価をみれば、三・七五キログラムあたりの平均価格は、一九年一一二円三六銭、二〇年一六円四銭、二一年一七円四九銭、二二年一一〇円八三銭、二三年一一〇円七一銭、二四年一九円八五銭、二五年一一一円七三銭、二六年一九円五〇銭であり、第一次大戦中の好況はきえうせたのである。そうした養蚕業の動向を、山越脩蔵も鋭敏に感じとつていたひとりであつて、のちに、一九年の「常規を逸した高景気」の反動として「社会不安はやがて深淵に現れるだろう」と考えた、と回想している。この「養蚕業をとりまく状況がきびしくなるにつれて、人びとの意識は、それだけつよく未来へのみちをさぐらざるをえなかつた」⁽⁶⁾。青年たちが学習意欲にもえ、さまざまの思想の摂取に意欲的な姿勢をみせるようになったのは、そのためであつた。

もう一つは、青年たちが高等教育を受ける機会を奪われていたことであつた。この地域の農村青年のうち、中学校に進学した者は、一九

二〇年代で、小学校卒業者の二パーセント程度といわれ⁽⁷⁾、高等学校、大学へ進学した者はほとんどいなかった。自由大学に参加した青年たちの大部分は、比較的富裕な種殖製造農家の長男であつたが、かれらの多くは地元の小県養蚕学校をはじめ上田中学校や上田蚕糸専門学校へ進学していった。したがって、小学校卒業だけの青年たちと比較すれば恵まれてはいたが、それでも、卒業後は家業を継ぎ地域に定住しなればならなかつたのであり、高等学校、大学へ進学することはできなかつたのである。山越脩蔵が自由大学を構想したのは、「田舎の農家に生まれて日常の農事に追われ、⁽⁸⁾永い冬の長夜はコタツで茶話に終る人生を何とかしなければならぬ」と思い、「文化全般に亘る学問を総合的に勉強できる機関を組織し、(中略)それが全国各地に波及したならば農村の人々や実業に就いてる人達も勉強の機会に恵れるではないか⁽⁹⁾」と考えたからであつたが、そこには、明確なかたちでは表現されていないけれども、当時の農村青年のおかれていた教育の現実を問題としつつ、民衆教育機関を創設していったことが知られる。

こうして信濃自由大学は一九二一年七月に発足したが、それは、上田・小県地方の学習意欲にもえた青年たちと、それに誘発されながらみずからも新しい文化運動の実現に意欲を示していた土田杏村との交流のなかから生み出されたものであつたのである。

[注]

- (1) タカクラ・テル「自由大学運動の経緯とその意義」(前掲)
- (2) 上野清造「大正期芸術教育運動の一考察」『教育学研究』第三九巻第一号(一九七二年)
- (3) 神川青年団「宣伝」(一九二〇年四月一日)

- (4) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(一九二〇年四月十九日)
- (5) 土田杏村「自由大学運動の意義」、『文化運動』一九二三年十月号
- (6) 土田杏村「我國に於ける自由大学運動に就て」、『文化運動』一九二三年一月号
- (7) 土田杏村「新人村としての神川村」、『改造』一九二二年七月号
- (8) 日本文化学院「綱領」、『文化』一九二〇年一月号
- (9) 土田杏村「社会主義とアナキズムの統一としての文化主義」、『文化』一九二二年十月号
- (10) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(一九二〇年九月六日)
- (11) 土田杏村「我國に於ける自由大学運動に就て」(前掲)
- (12) 猪坂直一「土田さんと自由大学」、『土田杏村全集』第八巻月報(一九三五年)
- (13) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(一九二二年一月二十五日)
- (14) 『文化』一九二二年五月号
- (15) 山越脩蔵「草稿・信濃自由大学」、『自由大学研究』第三号(一九七四年)所収
- (16) 猪坂直一「回想・枯れた三枝」(一九六七年)
- (17) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(一九二二年三月四日)
- (18) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(一九二二年六月二十日)
- (19) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(一九二二年六月二十六日)
- (20) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(一九二二年六月三十日)
- (21) 「信濃自由大学趣意書」の全文については、上木敏郎解題「土田杏村と自由大学運動」、『教育労働研究』第一号(一九七三年)などを参照されたい。
- (22) 土田杏村の構想した自由大学の理念については、大槻宏樹「自由大学運動における社会教育論」、『学術研究』第一九号(一九七〇年)がくわしく分析している。
- (23) 土田杏村「修養技手の蜘蛛網」(同「教育の革命時代」(一九二四年)所

必

- (64) 土田杏村「プロレットカルト論」、『中央公論』一九二三年七月号
 (65) 土田杏村「修養技手の蜘蛛網」(前掲)
 (66) 土田市史編さん委員会編『土田近代史』(一九七〇年)
 (67) 山越脩蔵「土田自由大学の頃(1)」、『信州白樺』第七号(一九七二年)
 (68) 鹿野政直『大正デモクラシーの底流』(一九七三年)
 (69) 池田正雄氏より聴取(一九七六年三月二十五日)。なお、長野県全体では、小学校卒業生のほぼ一〇パーセントが中学校へ進学している(『長野県教育史』別巻二「一九七五年」)。
 (70) 山越脩蔵「草稿・信濃自由大学」(前掲)
 (71) 山越脩蔵「土田自由大学の頃(2)」、『信州白樺』第八号(一九七二年)

二 学習活動の展開

この信濃自由大学の学習活動は、どのようにすすめられていったのか。

信濃自由大学は、一九二二年十一月一日、土田市横町の神職合議所を会場に、恒藤恭の「法律哲学」をもって第一期第一回講座を開講した。創設期の会場となった神職合議所は、「広さ四十畳ばかりの大広間だが、畳はもうボロボロになって芯が出て居り、建付の悪い戸口の隙からは寒い風が吹き込んで来る」という状態であり、また机や黒板も近所から借りあつめたものであった。このように貧弱な施設のなかで講座ははじめられたが、猪坂直一は開講の日のことをつぎのように回想している。「最初の講座であるからわれらは非常に緊張し、この

であり、貧弱である計画や、事業やが、あり余るほどあつて、われわれを失望させ、憤慨させる場合が少くないのは、まことに残念なことと思ひます。それからみると、信濃自由大学が、たとへてみると、むかしの塾でも思ひおこさせるやうな形態をとつて生まれ出て、謙遜に、質実に、みづからの存在と生長とをはじめたといふことは、それになつてはる人々の誰れにとつても、かへりみて心たのしく、心づよい事柄ではないでせうか」と、講師としての感激を語っている。

第二回講座は、十二月一日からタカクラ・テルによつて「文学論」の講座がおこなわれた。かれは、出講依頼に対して、「御引きうけは致しましたものの私の話は他の哲学や社会問題の話をやうに御参考になるまいと存じまして大変気にかかつて居る次第です。殊に仮りに『文学論』と題はつけましたものの実は只今私が創作しようと思つてゐる心持を偽らずに申し上げて見ようと思ひますので決して学術的に組織の立つた話しではありませんです。(中略)どうか前以てその点を御含みを願ひ度いと存じます」と書き送つていたが、その講座は、「講義といふよりは創作である。一言一句、僕等に何か深い暗示を与えねば已まない。そして随分難解な講義ではあるが、僕等は知らず識らずズルズルと引き込まれてしまふ」といった講義で、聴講者の好評を博したといわれる。土田杏村は、この講義の好評をよこごび、山越脩蔵にあててこう書いた。「高倉の講義を熱心にきいてくれたのは有りがたい。実は多少心配して居たのだ。少し論理型でなく、直覺型の男だから信州には向かぬぢやないかと思つてた。併しあの男の無邪気な、正直なところは是非貫つてやつて貰ひたいと思つて居たのだ。大好评で何よりうれしい。高倉も悦んで、手紙をよこした」。

若きプロフェッサーの講義を一語も聞き流すまいとした。その一夜の感激を私は今も忘れることができない。講義の途中で恒藤氏は急に内容を哲学概論にきり変え、いわゆる新カント派哲学の講義に入つた。学生の顔ぶれや質問ぶりをみて、まず基礎を与えねばならぬと思われたらしい。ところがこの講義がすばらしい。私はその頃哲学の勉強もやつていたが、恒藤氏の講義を聴くに及んで、今まで随分無駄な努力をしていたということが反省され、学問はこれであらなければいけないと痛感した。そしてこれからの講座がもたらすものを想像して更けゆく夜路を心はずませて帰つたものだ」。

自由大学の講義を終えて京都に帰つた恒藤恭は、「過般御地に参りました節はいろいろ御世話に相成りました。御かげ様でまことに愉快な一週間を送りました。(中略)はじめての事ではあり、準備も粗漏でまことにふつふつの講義でしたが私自身は、皆さんの真摯なかつ熱心な御尽力の態度なり一般聴講生諸君の篤学なそして元気にみちた様子なりに接して大変愉快でした。あのむかしの塾のやうな感じのする神道講習所(注・神職合議所)引用者のしんとしつまつた空気の中に、電燈の光があかるくたのしさに輝いた——あのアトモスフィアも、なつかしく思ひ出されます」と、自由大学の運営者たちにあてて手紙を書き、さらに「信濃自由大学聴講者諸君！」と題する一文を書き送っている。それは、第二回講座の講義に先立ち金井正によつて朗読されたが、そのなかでかれは、「今思ひ出してみると、神職合議所の建物の内部の光景が、そのよるよるの光景が、希望と光明にみちた会合のイメージとなつて、心にうかんで来ます。世の中には、殊に現在の社会には、外形が華麗であり、宏大であつて、しかも内容が空虚

かれの講義がいかに聴講者を惹きつけたかは、聴講者の日記にその一端をうかがうことができる。たとえば、青木猪一郎は「ゴッゴリの作品やらロシア革命の話でとても面白かつた。始めての日のあの向きでは何んな事になるかと打案じられたのに」と書き、中沢鎌次は「中中愉快であつた。高倉先生の話は実に面白く且分り易い」と記している。こうしてかれは、もつとも人気のある講師となつたが、この自由大学への出講がきっかけとなつて、二三年に土田市外の別所温泉に移住し、ここで「文筆活動をしたり自由大学で講義したり青年たちの相談相手となつたり」した。ことに自由大学に対しては、講師としてだけでなく、運営の相談にもあずかり、土田杏村とともにこの運動に積極的に協力していったのである。

二二年一月二十二日に開講した第三回講座は、はじめ土田杏村の出講が予定されていたが都合で行けなくなり、かわりに出陣が出講した。かれは、「哲学史」を講じたが、このときのことを、のちに「毎晩三時間あまりはみっちり講義をすることができた」が、また「その講義の前後にも、社務所に泊りこみの熱心な青年もあつて、いろいろ話し合つたが、みんな自分の気持ちをむきだしに話す真剣で実直な人々だった」と、回想している。

第四回講座は二月十四日から始まり、土田杏村が「哲学概論」を講義した。猪坂直一は回想する。「寒気なほ厳しい二月中旬の夜、僕等は毎夜震へながら氏の講義を聞いた。講義は岩波哲学叢書中の『哲学概論』(ベンデルバンド著、宮本和吉氏訳)を講義して頂いたのである。しかし哲学を講じながら、教育、文芸、社会問題と、いろいろな方面に批判を加へて行かれるのを、僕等は頗る愉快に聴いたもので

(第2期講座)

職義 聽講生	哲學概論	17	23	26	24	22	16	128
	法律哲學	14	12	23	17	6	9	81
文哲	文學論	5	5	7	2	1	1	21
	經濟學	1	2	2	1	2	2	10
宗教	哲學史	0	0	2	2	0	3	7
	社會學	7	5	3	4	3	3	25
聽講者延總計	合計	44	47	63	50	34	34	272

・『信濃自由大学の趣旨及内容』(1923年)による)

ある」ところが、土田杏村は四日目の講義を終えて宿舎に帰ると急に発熱し、このため講義は中途で打ち切られた。

三月二十六日からの第五回講座は、世良寿男の「倫理学」で七日間が予定されていたが、講師の都合で二日間で打ち切られた。このため当時上田に来ていた中田邦造に哲学の講義を依頼し、残りの日程をうめた。

ついで第六回講座は、四月二日から大脇義一が「心理学」を担当した。かれは、このときのことを、「講義の土台として、ドイツのアイグスト・メツサーの『心理学』を選び」、「これにヴントの『心理学要義』をも加味しながら、出来る限り初心者にも理解し易いように平明に話していった」が、「講義が終つてから活発な質問が起り、普通の大学では見られない熱心な研究意欲に少なからず驚いた」と回想している。この大脇義一の講義をもつて第一期の講座は終わった。

信濃自由大学では、このように農閑期を利用し、一講座三日程度の聴講料を徴収して、人文科学系の講座を中心に、一講座平均五日間、一日約三時間の講義をおこなっていた。第二期以降の講義の状況はほとんど知ることができないが、いま講座一覧を示せば第一表のようになる。その講義内容は、どの講師も普通の大学での講義と同様なもの⁽⁴⁾を講義していたと考えられており、現存するノートによればかなり高度であったことが知られる。自由大学七日間の講義は大学一年間の講義に匹敵したといわれ、第二期第五回講座に出講した山口正太郎は、「大阪商大の一年分の講義が五日目に終ってしまつて、あわてて宿屋で翌日の講義の準備をし」たというエピソードも残っている⁽⁴⁾。

聴講者は、養蚕にかかわりをもつ比較的富裕な農村青年と小学校教員を中心に平均四〇名にすぎなかったが（第二表）、聴講者と講師とは学問への情熱によつてむすばれていた。恒藤恭は「寒さにひきしまつた空気の中に、静けさがみら渡り、あかるくたのしげに輝く電燈の下に、聴講の方々の熱のこもった瞳をみひらいて、じつと聴講して下さるのを眺めながら、私は時間のうつるのを氣付かないでしゃべりました」と語り、新明正道は、自由大学に出講するさい、「私は本職の学校の教師ですが、案外所謂学校には眞の究学の氣持のある人の少ないのに悲觀しています。自由大学のような自ら進んで学問に近付こうとする人々の集つて来るところへ行つて話の出来るのを嬉しくおもっています」と書いている。

この自由大学のこころみは、各地に反響をよび、長野県をはじめ新潟県、群馬県その他の地方都市や農村に波及していった。すなわち、一九二三年には福島県相馬郡原ノ町に福島自由大学、新潟県北角沼郡

上田自由大学講座一覽

学期	開講年月日	日 数	講 師	講 座	聴講者数	会 場
1	1921.11. 1	7日間	恒藤 恭	法律哲学	56名	上田市横町神職合議所
	1921.12. 1	6日間	タカクラ・テル	文学論	68名	上田市横町神職合議所
	1922. 1.22	7日間	出 隆	哲学史	38名	上田市横町神職合議所
	1922. 2.14	4日間	土田 杏村	哲学概論	58名	上田市横町神職合議所
	1922. 3.26	2日間	世良 寿男	倫理学	35名	上田市横町神職合議所
2	1922. 4. 2	5日間	大脇 義一	心理学	31名	上田市横町神職合議所
	1922.10.14	5日間	土田 杏村	哲学概論	44名	上田市横町神職合議所
	1922.11. 1	5日間	恒藤 恭	法律哲学	47名	県蚕業取締所上田支所
	1922.12. 5	5日間	タカクラ・テル	文学論	63名	県蚕業取締所上田支所
	1923. 2. 5	5日間	出 隆	哲学史	50名	県蚕業取締所上田支所
3	1923. 3. 9	5日間	山口正太郎	経済学	34名	県蚕業取締所上田支所
	1923. 4.11	5日間	佐野 勝也	宗教学	34名	県蚕業取締所上田支所
	1923.11. 5	6日間	中田 邦造	哲学概論		県蚕業取締所上田支所
	1923.11.12	5日間	山口正太郎	経済思想史		県蚕業取締所上田支所
	1923.12. 1	5日間	タカクラ・テル	文学論		県蚕業取締所上田支所
4	1924. 3.22	5日間	出 隆	哲学史		県蚕業取締所上田支所
	1924. 3.27	5日間	世良 寿男	倫理学		県蚕業取締所上田支所
	1924. 4. 1	5日間	佐野 勝也	宗教学		県蚕業取締所上田支所
	1924.10.13	5日間	新明 正道	社会学(概論)		上田市役所
	1924.11. 3	5日間	今中 次磨	政治学(国家論)		上田市役所
5	1924.11.21	5日間	金子 大栄	仏教概論		上田市役所
	1924.12.10	5日間	タカクラ・テル	文学論		上田市役所
	1925. 3.21	5日間	波多野 鼎	社会思想史		上田市役所
	1925. 3.26	5日間	佐野 哲雄	哲学概論		上田市役所
	1925.11. 1	5日間	新明 正道	社会学	21名	上田市役所
6	1925.12. 1	5日間	タカクラ・テル	文学論(フランス文学)	30名	上田市役所
	1926. 1. 1		谷川 徹三	哲学史		
	1926. 2. 1		中田 邦造	哲学(西田哲学)		
	1926. 3. 1		金子 大栄	仏教概論		
	1926. 3.22	5日間	松沢 兼人	社会政策		上田市役所

再建 1	1928. 3. 14 1928. 11. 19	3日間 3日間	タカラテル 三木 清	日本文学研究 哲学論	60名 25名	上田図書館 上田市海野町公会堂
再建 2	1929. 12. 6 1930. 1. 24	4日間 3日間	タカラテル 安田徳太郎	日本文学研究 精神分析学	28名 44名	上田市海野町公会堂 上田市海野町公会堂

(拙稿「自由大学の講義内容について(1)」「自由大学研究」第2号〔1974年〕による)

堀之内村に魚沼自由大学、同県南魚沼郡伊米ヶ崎村に八海自由大学、長野県下伊那郡飯田町に信南自由大学（のち伊那自由大学）、二四年には長野県上伊那郡伊那町に上伊那自由大学、同県松本市に松本自由大学、二六年には群馬県前橋市に群馬自由大学がそれぞれ設立され、宮城県・京都府・青森県・兵庫県などでも自由大学設立のうごきがみられるようになったのである。そうして自由大学が各地に設立されるのにもとない、二四年二月に信濃自由大学は上田自由大学と、信南自由大学は伊那自由大学と名称をあらためた。さらに同年八月には各地の自由大学の連絡機関として自由大学協会が上田につくられ、二五年一月からは猪坂直一が発行兼編集者となって『自由大学雑誌』が刊行された。

上田自由大学は、このように全国に拡大した自由大学運動の中心となつて学習活動をすすめていったが、しかしそのころから聴講者の減少にともなう財政難にみまわれるようになっていた。一九二四年四月の時点での状況を、猪坂直一は、伊那自由大学の横田憲治にあてた手紙のなかで、「経営は不変困難です。約百二十円ばかり不足のやうです。でも今年が一番好成绩なんです。実は此の三、四月の多忙期に際して三講座ブツ通し暮合ひなしと云ふ有様なんですから無理は無理です。聴講者は三十四五名に減つて居ります」と書いたが、二五年五月になると状況がさらに悪化していたことが知られ、「上田も本年は不景気で平口しましたが、どうやら辻褄を合せました。年六回は重荷過ぎるとすれば越後の様に三四回に止めてもよいと思ひ居ります」と書くにいたっている。その創設当初から、「経費の全部を会員の持ち寄る小額の会費によって支弁するのを原則」とした自由大学にとつ

て、平均四〇名にすぎない聴講者の聴講料のなかから講師謝礼その他の経費をのぞくと経営はけつして容易ではなかった。二三年十月に「信濃自由大学ノ維持及び発展ヲ図ルヲ目的」として信濃自由大学会を設立し、会員からは一カ年二円の会費を、臨時会員からは一講座三円の聴講料を徴収することにしたのも、自由大学の経営の安定をはかるためであつた。だが、この地域の養蚕業の停滞と不安定の傾向の継続にともなつて、自由大学の聴講料は聴講者にとって負担になりはじめていた。青木猪一郎は、その日記に、「月々参円と云ふ大枚の聴講料が仲々大変だ」と書いている。こうして自由大学の聴講者はしだいに減少し、特権的大学を批判する自由大学の理念とも矛盾するよ

うな事態が顕在化するようになったのである。だが、聴講者が減少したのは、自由大学の講義内容がマンネリ化してきたことも原因していたと思われる。すなわち、その講義内容は主として哲学、文学など人文科学系の学問であり、これに対しては、聴講者のがわからぬ「自由大学の講義が難解に過ぎる不平、講義科目が偏し過ぎる」という批難、それは我等の常に耳するところである」と指摘され、運営者のがわでも「次期から陣容を新たに形而下の問題を多く取入れる事にしたい」とのべていたが、農村不況のなかに生きる青年たちの学習要求にじゅうぶん対応できず、聴講者の減少をきたしたと思われるのである。

上田自由大学は、このように聴講者の減少による財政上の困難に直面していたが、また講師難にも直面していた。自由大学の講師の多くは新進気鋭の研究者であり、したがって渡欧留学する人たちも多く、新しい講師の補充をしなければならなかった。はじめ講師の斡旋は土

田杏村の努力にまづところが大きかったが、かれの病気の悪化は、しだいにそれを困難にした。この土田杏村にかわつて大きな役割をはたすようになったのがタカラ・テルであつた。だが、かれは、社会運動のたかまりのなかで、「大正十四五年頃から著しく左傾し」、農民運動にかかわつていったことから、猪坂直一とのあいだに亀裂を生じはじめていた。そのことを猪坂直一はつぎのように回想する。「自由大学はもとより如何なる主義の宣伝機関でもなく、イデオロギイに超越的な学習機関として生まれ且つ育つてきた。（中略）このことは大正十三四年以後の高倉氏にとっては或いは不満であつたかもしれないが、われらとしては氏が追々自由大学から遠ざかつて行くように思われて悲しかった」。

そうした状況にくわえて、自由大学の運営を担当していた山越脩蔵が、製糸工場の経営に専念するようになり、また猪坂直一も「自由大学への努力を失つていった」。

こうして上田自由大学は、一九二六年三月の第五期講座の開講を機に、ついに中断せざるをえなくなった。伊那自由大学および魚沼・八海両自由大学は、その後さらに継続されたが、それらもまた昭和のはじめには相ついで消滅せざるをえなかったのである。

〔注〕

- (1) 猪坂直一「土田さんと自由大学」(前掲)
- (2) 猪坂直一「回想・枯れた二枝」(前掲)
- (3) 信濃自由大学委員諸兄宛恒藤恭書簡(一九二二年十一月二十八日)
- (4) 恒藤恭「信濃自由大学聴講者諸君へ」、「信濃自由大学趣旨及内容」(一九二三年)
- (5) 信濃自由大学発起者宛タカラ・テル書簡(一九二二年九月十三日)

- (6) 猪坂直一「上田自由大学の回顧」(五)、『自由大学雑誌』第一巻第五号(一九二五年)
- (7) 山越脩蔵宛土田杏村書簡(一九二二年十二月十二日)
- (8) 青木猪一郎「日記」(一九二三年十二月七日)
- (9) 中沢鎌太「日記」(一九二九年十二月六日)
- (10) 鹿野政直「大正デモクラシー」(一九七六年)
- (11) 出隆「出隆自伝」(一九六三年)
- (12) 猪坂直一「上田自由大学の回顧」(六)、『自由大学雑誌』第一巻第七号(一九二五年)
- (13) 山越脩蔵「上田自由大学の頃」(六)、『信州日権』第十二号(一九七三年)。世良勇男が途中で講義を打切つたのは、「講義をして二日に至つた所、自分の研究がまだ不充分で即ち自由といふことに付いてとんと行き詰つてしまつて如何とも進むことの出来ぬ事を発見したから」であつたという。細田延一郎は、その報告を聞いての感想を、「我々は大変腹合が脱けたがこれ亦如何ともすることが出来ぬ。否実こんな真面目な学者らしい先生の態度に非常に感動された」と、筆記帳に記している。なお、中田邦造の講義は「西田博士の哲学の研究に就て」で三月二十九日から四月一日までおこなわれた(細田延一郎「筆記帳」『自由大学講義二号』)。
- (14) 大脇義一「信州自由大学の想出、土木敏郎編「土田杏村とその時代」第七・八合冊号(一九六八年)、馬場直次郎「上田自由大学講座筆記」、中沢鎌太「自由大学筆記」其七
- (15) 遠藤恭「出講師 哲学史」
- (16) タカラ・テル「自由大学運動の経過とその意義」(前掲)
- (17) 恒藤恭「信濃自由大学聴講者諸君へ」(前掲)
- (18) 横田憲治宛新明正遺書簡(一九二三年十二月七日)
- (19) 魚沼・八海両自由大学については、拙稿「新潟県における自由大学運動」、『自由大学研究』第三号(一九七五年)、第四号(一九七六年)を参照されたい。

- ⑧ 伊那自由大学については、拙稿「伊那自由大学の歴史」、『月刊社会教育』一九七五年九月号を参照されたい。
- ⑨ これらの自由大学の講座一覧については、拙稿「自由大学の講座内容について」、『自由大学研究』第二号（一九七四年）を参照されたい。
- ⑩ 横田義治宛猪坂直一書簡（一九二四年四月一日）
- ⑪ 横田義治宛猪坂直一書簡（一九二五年五月四日）
- ⑫ 猪坂直一「上田自由大学の回顧（一）」、『自由大学雑誌』第一巻第一号（一九二五年）
- ⑬ 経費の大半を占める講師謝礼は一講座八〇円ないし一〇〇円であった（「信濃自由大学会計簿」）。経費の不足分は、山越脩蔵その他の青年たちの寄付金や、タカクラ・テルが上田付近の町村青年団で講演して得た謝礼金などによっておぎなった。
- ⑭ 「信濃自由大学の趣旨及内容」（一九二三年）
- ⑮ 青木猪一郎「日記」（一九二三年十一月十日）
- ⑯ N氏生「自由大学の二途」、『自由大学雑誌』第二巻第八号（一九二五年）
- ⑰ 横田義治宛猪坂直一書簡（一九二四年四月一日）
- ⑱ 猪坂直一「回想・枯れた二枝」（前掲）
- ⑲ 同前
- ⑳ 猪坂直一氏よりの私信（一九七二年六月二十三日）

三 上田自由大学の再建

一九二〇年代の後半をつうじて継続した農村不況は、一九二九年にはじまる大恐慌によっていつそう深刻化した。ことに商品化率一〇〇パーセントの養蚕・製糸業を主要産業とする上田・小県地方では、生糸価格・繭価格の暴落によって、深刻な状況を生じた。ふたたびこの地域の繭価をとってみれば、三・七五キログラムあたりの平均価格

は、一九二六年の九円五〇銭から、二七年一六円四一銭、二八年一六円七七銭、二九年一七円五一銭と下落し、三〇年には三円一四銭の安値におちこんだのである。この「繭価暴落ニヨル農家収入ノ激減ハ農民ノ生活ヲ脅威シ」、「農家経済ノ破綻」をもたらしたのであって、二九年十二月現在の、長野県農会調査による銀行および信用組合における長野県下農家一戸あたりの負債額は、平均八六八円にのぼり、年間所得の約二倍に達していた。ことに小県郡の場合には、一・一六三円と県下最高の負債額であり、この数字によっても恐慌の打撃がより深刻であったことが知られる。農業恐慌下の小県郡浦里村の状況は、「昭和五年突如トシテ襲来シタル農業恐慌ニヨリ、一般農産物価ノ下落、殊ニ繭糸価ノ暴落ハ本村農家ニ甚大ナル打撃ヲ与ヘ一戸当リノ収入ハ五百円ニ激減シ、負債総額ハ百十五万余円（一戸当リ一千四百三十七円）ヲ算シ、之ガ重圧ト所得ノ減少トハ村民生活ヲ脅威シ（中略）人心ノ不安焦躁ハ、遂ニ左翼農民組合ノ発生ヲ見ルニ至リ、青年訓練所ノ潰滅トナリ、村税ノ滞納数千円ニ及ビ各種ノ支払ハ全ク停止シテ、本村ノ前途実ニ憂慮ニ堪ヘザル状態ニ陥レル」という記述に、その一端をうかがうことができるが、この恐慌下の惨状は、浦里村にかぎらず、県下の農村に共通する現象であった。

長野県では、このような深刻な不況を反映して、尖鋭な農民運動、無産政党運動が展開された。上田・小県地方では、二八年四月、タカクラ・テルの指導のもとに上小農民組合連合会が組織され、二九年四月の村議選では公認候補を各村で当選させて政治的進出をはかるとともに、納税延期・農会廃止・借金支払延期・金利質屋利子引下げなどの要求をかかげた不況対策運動を活発に展開した。そうして上小農民

組合連合会は、三〇年十一月には全農全会派上小地区委員会となり、県下左翼の農民組合運動を展開していったのである。

このように、上田・小県地方では農民運動が活発に展開されたが、一方、この地域の青年たちの多くは、不況下のきびしい現実には農村受難の想念をいだき、ニヒリズムをはらみながらも「急進化」していた。状況打破への方策をさぐっていた青年たちの意識状況は、小県郡連合青年団が二八年三月の長野県連合青年団の研究大会に、「近時農村の行き詰まれる根本原因及之ガ解決方法如何」という議題を提出したことに示される。その提案理由はいう。「農村経済は益々行き詰まりつつある状態である。此の目前の事実を如何になすべきか。之ガ解決者は机上の学者、政治家ではない。実生活の上に体験を持つ吾々自身でなければならない。斯るが故に此問題を一片の言葉の遊戯でなく、実際的の立場に立つて研究してみたいと思ふのである」。

深刻化する農村不況に対する農村青年たちの反応は、こうして鋭角的にならざるをえなかったが、それとともに小県郡連合青年団は「急進化」してゆく。すなわち、長野県連合青年団のうごきと歩調をあわせて、青年訓練所廃止運動や、青年団の「自主化」は、当然認められるべきものである。思想的に危険などということはない^⑧として青年団自主化運動を、のちには電灯料値下げ運動を激しく展開していったのである。

上田自由大学は、このような状況のもとで、一九二八年三月、自由「大学の閉鎖は、地方民衆のこの上もない不幸だ^⑨」とする青年たちの努力によって再建される。一九二七年以降のいつそう深刻化した農村不況のなかで、状況打破にうごきはじめた青年たちが、その社会的実

践の「思想的な根拠を求めて」自由大学を再建したのである。その運営の中心に立ったのは、猪坂直一・山越脩蔵にかわつて、「急進化」しつつあった小県郡連合青年団の幹部、山浦国久・堀込義雄その他の青年たちであり、それに全面的に協力していったのがタカクラ・テルであった。タカクラ・テルは、自由大学再建の直前である二七年十一月の小県郡連合青年団幹部講習会において、「農村の青年は社会のあらゆる方面に精通し一旦社会にある現象等起つた場合此を批判して置く事の出来る程度の知識を養つて置かねばならぬ」とのべていたが、この発言は、自由大学の再建と直接むすびつくものではないにせよ、その再建の中心になったのが青年団幹部クラスの青年たちであることを考えると、その間の事情を示唆しているように思われる。

二八年二月、上田自由大学の再建をよびかける手紙がだされた。それは半紙に謄写すりされたものであるが、それには「私共は今回信濃自由大学の復活に就いて是非貴兄の御助力をお願いいたしたくて斯る手紙を差上る次第であります。（中略）既に御承知の事と存じますが信濃自由大学は別紙趣意書に依つて設立せられ四年間経営が続けられてきました。その間私共はその恩恵を受けて大いに啓発されるところがあつたのであります。然るに種々の支障から休まねばならなくなつて二年間閉鎖を見る事ができませんでした。ところが地方文化開拓の爲には唯一の機関たるこの大学の閉鎖は地方民衆の此上もない不幸損失であるといふのでその復活を希望する人達が少くありません。私共は是等の有志諸君と共にこの有意義な文化運動機関の再興を熱望してやまないであります」と書かれた。

そうして三月には、再建第一期第一回講座として、タカクラ・テル

の「日本文学研究」を開講する旨の案内状が会員に配布されたが、それには、自由大学が「継続会員によりてのみ維持し発展し得ること」が強調され、また暫定規約として「毎年十一月から翌年三月までに三回乃至五回の講座をひらいて、主として文化科学について聴講研究し、会費は年額五円として之を三回に分納し、臨時会員には一講座二円」の聴講料を徴収することがあらかじめされている。

その第一回講座は、三月十四日からタカクラ・テルが講師となつて「日本文学研究」を講じた。このとき会場の上田図書館に集まった聴講者は六〇名であつた。当時の新聞記事によれば、婦人数名も加わり「盛会をきはめた」とあり、その講義内容は「世界の人類を語学上より分類して日本文学に及ぶまでを述べたもの」であつたという。この講義を聞いた中沢鍾太は、その感想を「新しい面白い話であつた」と、日記に書いている。

ついで同年十一月十九日には、第二回講座が三木清を講師に開講された。かれは「哲学論」を講義したが、その講義は、タカクラ・テルの回想によれば、「講義の題目は『哲学論』というのでしたけれども、内容はけっしてそれまでの哲学の講義ではなく、むしろよく多く政治的なものをふくんでいた」といわれる。この時期の三木清は、『唯物史観と現代の意識』（一九二八年）をだし、また羽仁五郎とともに『新興科学の旗のもとに』（一九二八年十月創刊）を刊行するなど、マルクス主義に接近していた時期であり、そのかれを講師として招いたところに、この時期の自由大学の聴講者の意識動向をみることができる。

だが、その後の講座の開講は、再建時に構想していたようにはゆか

なかつた。二九年三月にはタカクラ・テルの講義が予定されていたが中止されている。それは、二九年三月一日の上小農民組合連合会第二回大会に招かれて上田に来た山本宣治が、三月五日に暗殺され、山宣と親戚関係にあったタカクラ・テルが急遽上京しなければならなくなり、それが影響したのである。

けれども二九年十二月からは第二期の講座が組まれた。その第一回講座は、タカクラ・テルが担当して、十二月六日から「日本文学研究」の講義がおこなわれ、ついで第二回講座は、三〇年一月二十四日に開講され、安田徳太郎が「精神分析学」を講義した。

この安田徳太郎の講義を聴講した深町（旧姓三手）広子は、のちに、その講義内容について、「どなたでも、フロイドの精神分析の一通りは面白くわかつた筈です」とのべ、さらに「どなたか安田先生に質問したら、小児病的と言う批判があつた。私はその時左翼小児病と言う言葉を覚えたのです。（中略）青年たちの間で簡単に小児病的と言う言葉がやりとりされていゝた、と講義時の状況を回想している。その開講案内状には「精神分析学はプロレタリアの生み出した唯一の興味ある学問である」とあつたが、いずれも当時の自由大学の雰囲気をつたえていて、興味ぶかい。

自由大学の会員には、『階級闘争』、『農民運動』の進出、これも此の社会に適用される問題の中だ」という意識から、「働いても、働いても、じめじめした、社会の片隅に呻吟している」人びとがいる「あまりにも不合理な、つまり矛盾してゐるこの社会」を研究し、その「改善に向つて進むのが、私達の使命であり、義務ではなからうか」と発言する青年がいたのであり、また上小農民組合連合会の井沢謙や

井沢国人など、タカクラ・テルとともに農民運動にかかわつていた貧農層の青年たちも多く参加するようになった。こうして青年たちは、「自由大学に、知識より分析を多く要求するようになった」といわれ、自由大学での学習を実践にむすびつけてゆくうごきもみられたのである。

しかし農業恐慌の深刻化と生活難の継続は、自由大学の経営を破綻させ、講座の継続を困難にした。自由大学の聴講者の生活をささえていた養蚕―製糸業は、恐慌によつて潰滅的な打撃をこうむり、一講座一円五〇銭ないし二円五〇銭の聴講料をだして講義をきく青年たちはほとんどなくなつたのである。タカクラ・テルは、自由大学の経営が困難となつた原因の一つを、こう回想している。「自由大学の運動は、昭和四・五年頃から次第に衰えて来た。その第一の原因は農村の激しい不況であつた養蚕の中心地帯である長野県の農村で、繭値の下落によつて、特別の苦境に落ちた。すべての農家がひどい負債のために実際餓死のすぐ一歩手前に迫りやられ、各地に小作争議その他の闘争が頻発した。月々二円乃至三円の会費を出して講義の聞ける農民が殆ど無くなつた。そこで、会員が次第に少なくなつて、とてい經費の維持が出来なくなつた。私の講義だけが最後まで聴講者が多かつたので、初めその会費おほかの講義の費用に廻したりしていろいろ工夫おしてしたが、それもしまいに続かなくなつた」。

また、自由大学の継続が困難になつたのは、講師としてまた講師の斡旋に努力するなど自由大学をささえていたタカクラ・テルが、しだいに活動の重点を農民運動の方にうつしていったことも大きな要因であつた。タカクラ・テルは「わたしの考え方・立場・行動がしだいに

大きく変つていきました。つまり、しだいにしんげんに共產主義者としての道をあつくことになりました。具体的には、しだいに、労働者・農民といつしよに労働争議や小作争議をたたかうようになり、いつしよにその理論を学習するようになり、いつしよにその組織活動に全力をあげるようになりました」と、この時期のことを回想している。

さらに、タカクラ・テルが農民運動にかかわつてゆくとともに「北信左翼論壇の雄将」として官憲のきびしい監視をうけたことや、自由大学自体も「急進化」していったことから、公開形式による講座の開講が困難になつたことも要因の一つであつた。一九三一年から三二年にかけての西塩田村小作争議のころには、タカクラ・テルは「始終刑事に尾行され、農民たちが学習会を開くときには「五、六人くらいでグループを作り納屋とか蚕室に集まつて」おこなわざるをえなかつたように、非公然化せざるをえなかつたのであり、学習形態としても自由大学の有効性は消滅していったのである。

こうして三〇年一月の安田徳太郎の講義以降、自由大学の講座はとだえた。三木清の「社会問題研究」の講座が計画されたこともあつたが、中止になつてゐる。三一年四月に会員に送付された通知には、「今冬十一、二月の候においては、是非とも開講いたしたいと忝じております」と書かれたが、しかし実際には、すでに講座を組織できる状況にはなかつた。自由大学の大きな柱であつたタカクラ・テルは、三二年二月にはじまつた西塩田村小作争議にかかわり、自由大学からは遠ざかつていった。こうして上田自由大学は、三〇年一月の安田徳太郎の講義を最後に、三一年には幕を閉じたのである。

〔注〕

- (1) 上田市史編さん委員会編『上田近代史』(前掲)
- (2) 長野県内務部農務課『長野県の不況実情』(一九三三年)
- (3) 農林省経済更生部『全国優良更生農村経済更生計画及其ノ実行状況——長野県小県郡浦里村事例——』(一九三七年)
- (4) 上条宏之『恐慌下農民運動と経済更生運動』、『季刊現代史』第二号(一九七三年)
- (5) 長野政壇『大正デモクラシーの底流』(前掲)
- (6) 『盛城時報』第二八号(一九二九年七月一日)
- (7) 『神川』第二号(一九二八年三月十一日)
- (8) この時期の上田自由大学について、くわしくは、拙稿『昭和恐慌と自由大学運動——上田自由大学を中心に——』、『長野県近代史研究』第六号(一九七五年)を参照されたい。
- (9) タカクラ・テル氏より聴取(一九七三年八月十四日)
- (10) 『塩尻時報』第三二二号(一九二八年二月十一日)
- (11) 一九二八年二月二十二日付
- (12) 一九二八年三月四日付
- (13) 『北信毎日新聞』一九二八年三月十六日
- (14) 中沢謙太『日記』(一九二八年三月十六日)
- (15) タカクラ・テル『知識の良心』、『世界』一九四六年九月号。回想では、三木清が出獄したのを一九三一年としているが、記憶の誤りであると思われる。
- (16) 上田自由大学『自由大学期目録要文件通知』(一九二九年三月十二日)
- (17) 深町広子『自由大学と私』、『自由大学研究』第二号(一九七四年)
- (18) 一九三〇年一月十八日付
- (19) 坂口友幸『学校壁外の青年となるに当りて』、『神科時報』第五四号(一九二九年四月十五日)
- (20) タカクラ・テルの手紙(小林利通『幻想としての自由大学』、『自由大学研究』第二号(一九七三年)所引)

- (21) タカクラ・テル『自由大学運動の経過とその意義』(前掲)。第二期第二回講座終了時の会計状況は、一四円五三銭の不足を生じ、それを借入金でまかなう状況となっている(上田自由大学会計簿)。
- (22) タカクラ・テル『自由大学かんけいの書簡集』(拙稿著『伊那自由大学関係書簡』(一九七三年)の序文)
- (23) 長野県庁文書『昭和八年事務引継書』
- (24) 深町英夫氏の証言(小林利通・前掲論文所引)
- (25) 『北信毎日新聞』一九二九年十二月四日
- (26) 一九三二年四月九日付
- (27) タカクラ・テル『長野県西塩田村小作争議』、『アカハタ』日曜版(一九六四年二月二日—四月十九日)

おわりに

本稿では、長野県上田・小県地方を中心にほぼ十年間にわたって学習活動を展開した上田自由大学のうごきをみてきた。

上田自由大学は、この地域の大正デモクラシーのたかまりのなかで形成され、学習活動をすすめていったが、この運動の推進力となつたのは、主として養蚕にかかわりをもつこの地域の農村青年たちと、それに協力した土田杏村やタカクラ・テルをはじめとする知識人であつた。

この上田自由大学の学習活動は、デモクラシーの機運のもとで、あたらしく知的活力をみせはじめた農村青年たちが、この地域の主要産業である養蚕業のゆきづまりの傾向が明瞭となつたなかで、学習をつうじて未来をさぐるうとした運動であつたが、それは、教育機会にじ

ゆうぶん恵まれることなく教育を受ける権利を奪われていた青年たちが、みずから手で学習の場を創造していった運動であることを意味するものであつた。そうしてそこには、一九二〇年代をつうじて国家のがわからの国民の思想「善導」がさまざまなかたちで強化されていったなかで、そのような国家の統制による社会教育の実施に対する批判にとどまらず、国家による国民教育の普及の現実が教育機会の形式における均等であり、内容における体制支持のイデオロギーの注入であることへの批判がこめられていた⁽¹⁾。

上田自由大学は、はじめ民衆自身の知的欲求の向上と自己成長のための学習運動としての側面がつよかつたが、のちには地域変革のための学習運動としての側面をつよめていったのであり、農民運動ともむすびつきつ講座を組織していったのである。それは、この地域の農業恐慌が深刻化し階級対立が激化するなかで、消滅してしまつたが、この学習運動をつうじて、タカクラ・テルを軸にして、「ブルジョア的自由的拡大をめざした自由大学関係者と、社会変革を求めた農民運動のあいだに、ある種の統一戦線が」存在したことは、注目されねばならない。上田・小県地方は、一九三三年の二・四事件で弾圧をうけるまで、農民運動がもつとも活発に展開された地域の一つとなつたが、自由大学の学習活動は、そうした活動を許してゆく基盤の一つを形成していったのである。すなわち、この地域の農民運動の「最も有力な指導者たちが自由大学の中から出た」⁽²⁾ばかりでなく、農民運動を側面から援助した人びとのなかには自由大学の聴講者も少なくなつたのである。

このように上田自由大学の存在は、この地域の農民運動に影響を

たえていったが、また、ファシズムへの抵抗の姿勢をくずさなかつた人びとや、十五年戦争中もリベラルな姿勢をもちつづけた人びとを生み出していった。たとえば、西田幾多郎に私淑して、実業のかたわら読書にうちこみ、農民美術や自由大学の運動にかかわり、その後唯物論研究会に参加し、戦争中は戦争への批判をもちつつ神川村長となり、敗戦のまぎわには長野刑務所で獄死したマルクス主義哲学者戸坂潤の身柄引受人となり、戦後は共産党に入党した金井正の軌跡は、そうしたあり方の一つを示している。このような人びとは、けつして少なくなかつた。そうしてこのような人びとを生み出した上田自由大学の存在は、敗戦直後にこの地域の民主的エネルギーを噴出させてゆくための素地をつくつたといふことができる。たとえば、一九四五年十二月に、小宮山量平・山越定吉が中心となり、タカクラ・テルの協力のもとに、上田自由大学を復活させたのは、そのことを示している。またわたたくしが調査したかぎりでは、かつての自由大学の聴講者のなかには、一九四六年の総選挙で共産党から立候補して当選したタカクラ・テルに、思想的立場をこえて投票した人びとが少なくない。

上田自由大学がどれだけの意義をもつたかということは、タカクラ・テルがいろいろな「もつと長い歴史に語らせ」なければならぬが、いまのべてきたことから、上田自由大学の歴史が多くの問題点を残しつつも、それがもつていた歴史的意義を示しているように思われる。

〔注〕

- (1) 拙稿『自由大学運動と国民の学習権』、『民衆研究会会報』第二号(一九七四年)

- (2) 鹿野政直「絹の道と青春」、朝日新聞社編『思想史を歩く(下)』(一九七四年)
 (3) タカクラ・テル「自由大学運動の経過とその意義」(前掲)
 (4) 小林利通・前掲論文
 (5) 小崎重司「農民哲学者・金井正」、『思想の科学』別冊第九号(一九七四年)
 (6) この上田自由大学は、「この度の敗戦によって吾々は日本人の国民としての民度が如何に低いかをはつきりと知り、愈々自由大学の使命の重かつ

大なる事を知りました」との認識のうえに、「その地方一般人の道徳と知識の向上とを目的」として再建されたもので(「上田自由大学趣意書」(一九四五年十二月二十日)、タカクラ・テルをはじめ、平野義太郎・大内兵衛・羽仁五郎・井上清丸・守屋典郎などが講師として招かれた。しかし短期間で消滅している(酒井武史「『反大学』の源流」、『朝日ジャーナル』一九六九年十月十九日号)

- (7) タカクラ・テル「自由大学運動の経過とその意義」(前掲)

読書調査から――

▽東京市月島第二小・小樺誠「による一九二九～三一年、尋五から高一まで約五十名クラスの三年間の合計からみれば、(各三月時点の計、延人数は一四四名) ①少年倶楽部 六九②キング二二 ③日本少年一九 ④少年世界一八 ⑤たんかい一六 ⑥幼年倶楽部二三 ⑦富士一一 ⑧講談倶楽部一〇、以下子供の科学、面白い理科、朝日、野球界各七となっている。(注：キング、富士、講談倶楽部等は高が大多数)

▽愛知県社会教育課による一九三〇年の青年団調査のうち安城町の場合をみれば、五七五名中――

①キング二五七、②向上の青年三三、③安城農報二二④富士一九、⑤講談倶楽部一二、⑥少年倶楽部、愛と汗、雄弁、愛知の青年、園芸各一一、⑦家の光九、⑧朝日八、⑨現代七、⑩長篇小説、希望、使命、豊橋支部報各六、⑪改造五、⑫主婦の友、大衆文芸、我が家、文芸春秋各四となっている。(安城町青年団史)

▽東京市立図書館調によれば、一九三二年九月からの一年間「満州事変に関するものが最も多く読まれました。この頃は少し下火になりましたが……国防的のもの例へば飛行機だとか軍艦だとか我等の陸海軍といふやうなものよく読まれたのも社会現象の影響だと思ひます。伝記物では乃木大将とか東郷元帥とかいう軍人物、それから小説も今まであまり読まれなかった古い戦争物例へば日米戦争未だ来記……前には佐藤紅緑あたりの立志小説が歓迎されたものですがこの頃は皆戦争小説の方へ走ります。また映画が上映されるとその本が引張り出されます。ですが時期物は一体に命は短いやうです。それらに次いで多く読まれるのは漫画物で……」

(『教育週報』'32・10・29)

▽農村娯楽についての一九三二年文部省社会局の調査によれば、①映画②盆踊③村芝居のほか囲碁将棋、浪花節、神仏詣、角力、蓄音器等があがっている。

▽都市細民の娯楽調査例――一七〇頁参照